



ハイナイト祈禱課題 2026年1月号

『ハヌカの祭りを襲ったテロを覚えて』

12月14日、オーストラリア・シドニーで、ユダヤ人を狙った銃撃テロが発生しました。15人が死亡、40人以上が負傷する惨事となりました。その日は、ユダヤの祭り、ハヌカの初日。最初のろうそくに火をともしセメニーのため、ビーチには、約千人のユダヤ人が集まっていた。犠牲者の最年少は10歳の女の子。そして、最年長は87歳のホロコースト生存者の男性で、奥さんを守ろうとして命を落としました。

この事件は、イスラエル国外のユダヤ人社会を襲った事件として、過去30年で最悪のものとなりました。テロ発生直後、イスラエルは、先月ハイナイトでも祈禱課題に挙げた救急支援団ZAKAをシドニーに派遣しました。BFPは今回、その派遣の支援をさせていただきました。現地のラビが、BFPオーストラリアのスタッフに感謝を語ってくださった映像があります。ご覧ください。

※●ハイメール通信No.950 2025.12.22もご参照ください。



テロ犠牲者 15 名。イスラエル国外のユダヤ人社会を襲った事件で過去 30 年最悪 Courtesy

1. ガザから生還した人質たちの新たな歩みのために

2023年10月7日、ガザに拘束された人質は、251名。そして、168人が生きて帰還しました。今も1名の遺体がガザに残されたままです。

ハイナイトで祈り続けてきたアロン・オヘルさんは、インタビューの中で、初めから「生き延びる」という明確な決意を持っていたと語りました。

「猿のようにつなぐ、犬のように食べる。ここでは人間ではない。動物なんです。それが1年半続いた」

アロンさんは、ノバ音楽祭で拘束されました。シェルターに逃げ込みましたが、テロリストが次々に投げ込む手榴弾の一発が、ある若者の左手を吹き飛ばし、その破片がアロンさんの目や肩に刺さりました。そしてトラックに投げ込まれ、ガザに連れて行かれました。全身が焼けつくような痛みの中で自分に言い聞かせていたそうです。「何があっても、生きることを選ぶ」

翌朝、目を覚ますと、痛みで息もできませんでした。麻酔なしに、体に破片が残ったまま縫合されたのです。当時を思い出して、アロンさんの体は激しく震え始めました。「一瞬で、人生を奪われた。たった1秒で、現実から引き裂かれ、地獄に放り込まれたのです」

毎日夜になると、アロンさんは母親に語りかけるように声に出して言い続けました。「大丈夫。僕は生きている」と。

53日後、地下トンネルに移されたアロンさんを支えたのが、エリ・シャラビさんでした。エリさんは、父親のような存在となりました。「壊れ

てもいい。でも生きろ。希望だけは失うな」と、アロンさんを励まし続けました。

別のインタビューでエリさんはこう振り返ります。「最悪の時は、壁でも食べられそうなほど腹が減っていた。床に落ちたパン屑を、一粒残らず集めていた。そんな中でも、アロンは、『全員にもらえないなら、僕もいらない』と、自分だけが食べ物をもらうことを拒否した。勇気じゃない。価値観だった」。エリさんが暴力を受けて倒れた時、アロンさんが体を張って、守りました。一方、怒りで、素手で壁を殴ったアロンさんをエリさんは抱きしめました。「それは父の抱擁でした」。2人は、イスラエルで待つ家族のために、生き延びると約束し合い、解放後の夢を語り合いました。

解放後、エリさんは、10月7日に妻と二人の娘が殺害されていたことを知ります。「アロンは、私に意味を与えてくれた。10月7日に私は、娘たちを失った。しかし父親である意味を見いださせてくれたのです」

アロンさんは現在も治療を続けながら、ピアノを弾き始めました。神にあわれみを求める曲を歌う動画もSNSで公開されています。解放された人質の一人ひとり、想像を絶する苦しみと恐怖を通り、トラウマとの闘いが続いています。中には、エリさんのように解放後に、家族の死に直面した人たちもいます。トラウマから解放されるまでには、長い時間がかかるでしょう。それでも、彼らは、希望を持って生きるために新たな歩みを始めています。主の特別な癒やしと今後の歩みのために祈りましょう。

だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ。(イザヤ41:8)

- ①人質たちの癒やしがたい傷に主が触れてくださり、天からの慰めと解放、癒やしがあるように。
- ②人質たちの生活再建のために具体的な助けが備えられるように。
- ③主が彼らの人生を大いに祝福し、この悲劇を通して生ける神が世界に証しされるように。

2. 日本の教会が神の愛でイスラエルを愛せるように

23年10月7日以降、反ユダヤ主義が世界を席卷しています。日本でも反イスラエル・反ユダヤ的な偏向報道が目立ち、イスラエルを嫌悪する日本人が増えました。ピュー・リサーチ・センターが昨年実施した調査では、イスラエルに否定的な見方をする日本人の割合は、25カ国中3番目に多いという結果でした。回答者の約8割がイスラエルに否定的という衝撃的な結果です。

かつてホロコーストを実行したヒトラーは、その著書でこう記しました。「国民は、小さなうそより、大きなうそにだまされやすい」。日本でも、

イスラエルに関する誤った情報が多く報道され、「イスラエルは虐殺国家だ」と信じる人々が大勢います。こうした影響を受け、イスラエルを支援すること自体が非難される時代となりました。

当然、イスラエルにも弱さがあり、課題もあります。ルツも、イスラエルに移住後、大変な苦勞を味わいました。しかし、ルツの信仰は弱まることなく、神の愛をもってイスラエルを愛し続けました。私たちも、どのような時代が到来しても、ルツのように神の愛でイスラエルを愛し、とりなしてまいりましょう。

「……あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」(ルツ1:16)

- ①日本の教会が、時代の風潮に流されず、神の愛でイスラエルを愛し続けられるように。
- ②日本のクリスチャンが、反ユダヤ主義に脅かされることなく、イスラエルを支えていけるように。
- ③今年、イスラエルを愛し、支える人が一人でも多く日本に起こされるように。

3. BFPのエルサレム・マラソン参加を覚えて

3月27日、BFPはキッズ・プログラムを応援するため、エルサレム・マラソンに参加します。

エルサレム・マラソンは、毎年3月に開催される国際的な市民マラソン大会です。800mからフルマラソンまで6つのコースがあり、子どもから大人まで年齢や障害の有無にかかわらず参加できます。コースは、エルサレムの三千年の歴史を物語る史跡を巡り、参加者がこの街の歴史と文化を体感できる、世界でも類を見ないものです。昨年は、世界50以上の国と地域から、過去最高となるおよそ4万人が参加しました。

多くのランナーが、それぞれの願いを胸に参加しています。BFPの現地ボランティアも例年参加してきたマラソンですが、今年は特別です。キッズ・プログラムのチャリティーとしてマラソンに参加します。現地ボランティアや各国の支援者たちがBFPのTシャツを着て走り、さらに、支援先の子どもたちも一緒に走る予定です。ボラン

ティアたちと子どもたちが参加することで、世界各国の支援者の皆様にキッズ・プログラムのことをもっと知っていただきたい。またイスラエルの人々にも、世界中のクリスチャンがイスラエルの子どもたちを愛し、支援していることを知っていただく機会となることを願っています。

2年以上にわたる戦争により、イスラエルの経済は疲弊し、支援を必要とする子どもたちは増えています。とりわけ社会的に弱い立場にある子どもたちは、計り知れない影響を受けてきました。一方で、支援が追いついていないのが現状です。

このマラソン参加が、子どもたちの励ましとなり、またBFPボランティアたちの存在が、戦争から立ち上がろうとするイスラエルの人々への平和と希望のメッセージとなるように。さらに、この取り組みを通して、キッズ・プログラムに参加してくださる方が起こされるように、お祈りください。

こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。(エペソ2:19)

- ①エルサレム・マラソンに関わるあらゆる準備が整えられるように。
- ②マラソンに参加するBFPのボランティアと子どもたちの心が、主の平安と希望で満たされ、その姿がイスラエルの人々の励ましとなるように。
- ③エルサレム・マラソンを通じて、神さまが多くの人の心に触れてくださり、キッズ・プログラムの支援者がさらに起こされるように。



特定非営利活動法人 **B.F.P. Japan**(ブリッジス・フォー・ピース)

TEL: 03-5969-9656 FAX: 03-5969-9657 URL: www.bfpj.org

ハイナイトに関するお問い合わせ: chainight@bfpj.org